

真珠で輝く女子部の挑戦

～その輝きは手仕事により海から生まれる～

立神真珠養殖組合女子部

森下里織

1. 地域の概要

私たちが真珠を養殖している志摩市は、三重県の志摩半島に位置し、市の全域が伊勢志摩国立公園に含まれる(図1)。アコヤ貝真珠養殖の発祥地である。真珠は、県の「三重ブランド」に第1号として認定された。

昨年度には「伊勢志摩サミット」が開催され、真珠のラペルピン(Lapel pin)が脚光を浴び、真珠いかだの浮かぶ英虞湾が日本のふるさとの原風景だと紹介された。人と自然が共生する「里海のまち」である。

また、平成29年3月に「鳥羽・志摩の海女漁業と真珠養殖業」が、国の「日本農業遺産」に認定された。



図1 志摩市の位置図

2. 漁業の概要

真珠養殖業は、戦後、志摩を中心に発展した。現在、県内には6つの真珠養殖漁業協同組合がある。近年の県真珠養殖生産量および経営体数は、昭和59年ごろをピークに現在まで減少傾向で推移している(図2,3)。

私たちが所属する立神真珠養殖漁業協同組合は、昭和36年に設立され、現在の養殖経営体数は81戸で構成され、県生産量の約4分の1を生産している。

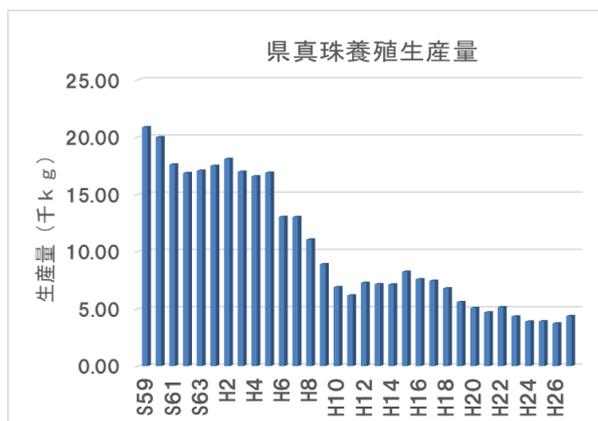


図2 県真珠養殖生産量の推移

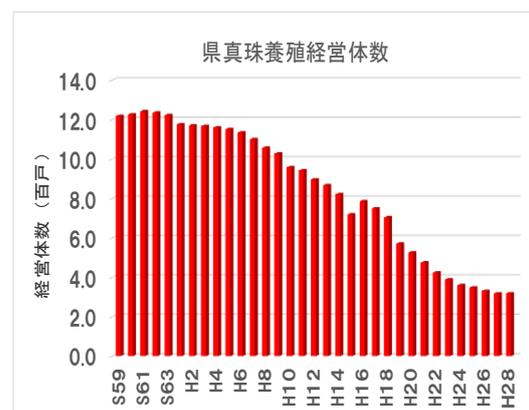


図3 県真珠養殖経営体数の推移

3. 女子部の組織と運営

平成24年6月に組合の女性職員を含む真珠養殖業に携わる女性6人で「立神真珠養殖組合女子部」を結成した(写真1)。現在の部員は12人で、県内外イベント参画や手作り真珠アクセサリーの製作販売に取り組んでいる。

部員の多くは市外から嫁いで来、養殖業と主婦業を両立している。女子部結成を機に、両立に悩む女性同士の泣き笑い話に共鳴し、日々、励まし合いながら絆を深めている。



写真1 女子部の結成

4. 実践活動取組課題選定の動機

平成20年ごろから組合の女性職員が「真珠は冠婚葬祭に必需品だけど、かわいい真珠アクセサリーを作ってPR普及したい」と組合長に提案し、1人で作り始めていた。

そのような折、県から誘われ、平成24年1月に東京での三重県フェアに真珠PR体験ブースを出展することになった。職員1人が試行錯誤して準備し、出展したものの、初めての経験の上に準備不足で満足いく対応ができなかったと涙していた。

その時すでに、2カ月前に県の『復興応援フェア』へ出展が決まっていた。短期間での準備に焦り悩む職員を見て、女性養殖業者3人が「真珠PRのために、一緒に頑張ろう」と集まり、皆で準備をした(写真2)。そして、無事に真珠PR体験ブースを出展することができた。



写真2 イベント出展準備作業

当日、体験ブースは人で溢れ、「アコヤ貝から真珠を取り出す体験にわくわくした」「自分で真珠アクセサリーを手作りできて、うれしい」等、喜びの声を多く聞いて、感動した(写真3)。なお、ブース体験料は全てを復興支援に寄付し、貢献できた。



写真3 復興応援フェア

この時、私たちの真珠愛のハートに灯がともり、女性養殖業者ならではの「真珠PR体験活動」の必要性を強く感じ、組合長にその思いを伝えた。組合長も「真珠の消費者は女性だから、女性目線でPR活動をぜひやってほしい」と後押ししてくれた。そこで、気の合う養殖仲間にも声を掛け、女子部を立ち上げた。同時に、ブログも開設した。

この復興イベントの経験こそが今も続く女子部活動の原動力になっている。

そこで、真珠PR普及のため以下の3つのことを目的として、女子部活動に取り組んだ。

- (1) 参加体験型ブースで真珠の魅力と真珠養殖業を分かりやすく伝えPRしていく。
- (2) “カワイイ”真珠アクセサリーの製作・販売によって真珠を普及していく。
- (3) 女性の養殖業者が暮らしやすく、活躍できる環境づくりを目指していく。

5. 実践活動状況及び成果

(活動1) 参加体験型ブースで真珠の魅力と真珠養殖業を分かりやすく伝えPRする取組イベントのアンケート結果から、真珠の生産地に三重県と答える人が67%と多かったが(図4)、実際「真珠はどうやって育てているの」との声が多くあったため、真珠養殖について正しく伝える必要性を感じた。このため、養殖道具や写真パネルの展示、女子部手作り紙芝居を用いて、養殖の作業工程や手仕事の工夫を分かりやすく伝えた(写真4、5)。

参加体験型ブースでは、低品質で処分される規格外の真珠を有効利用し、ドアプレートやアクセサリーを作る準備をした。

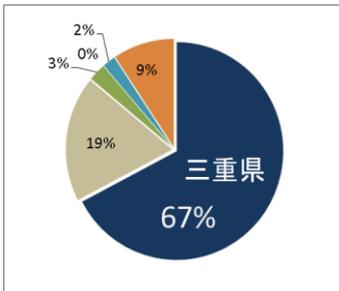


図4 生産地でイメージする所



写真4 手作り紙芝居『しんじゅようしよくの一年』



写真5 英虞湾の真珠養殖場での仕事風景

① 県内での活動

平成24年度から伊勢志摩地域を中心に、地元の水産高校とも協力して「里海文化祭」等をはじめ(写真6)、6年間で延べ21回出展した(図5)。

参加者から「地元だけどあまり知らなかった真珠養殖の苦労話を聞いて感動した」「自分だけの真珠アクセサリーを作れてうれしい」など、志摩特産品の真珠に愛着が深まったと感じた。

特に、アコヤ貝から実際に真珠を取り出す体験は大人気で(写真7)、「初めての体験にドキドキした」「アコヤ貝の中で育つ真珠に神秘性を感じた」など多くの参加者は感動していた。



写真6 里海文化祭



写真7 貝から真珠を取り出す体験

年度	県内	県内での主な参画イベント	県外	県外での主な参画イベント
H23		三重の農林水産業復興応援フェア(津)		三重の美味しいパワーフード(東京)
H24	6	里海フェスティバル(志摩)	2	きさらづ福祉まつり(千葉県)
H25	7	伊勢大祭(伊勢)	3	子ども霞が関見学デー(東京)
H26	3	真珠ふれあい広場(津)	4	みなと木更津うみ祭り(千葉県)
H27	3	鳥羽志摩物産展(津)	8	日本の職人展(愛知県)
H28	1	JICA研修(志摩)	4	伊勢志摩真珠職人物語(埼玉県)
H29	1	全国アマモサミット(志摩)	2	伊勢志摩真珠職人物語(愛知県)
計	21回		23回	

図5 女子部の真珠PR体験イベント参画実績(回数)

また、国際交流として、JICAの外国人研修生を組合が受け入れ、協力した。研修生は英虞湾の自然と共生している真珠養殖業に驚いていた。また、真珠アクセサリーを作る体験では「家族へ最高のプレゼントが出来た」と喜んでいて(写真8)。

さらに、志摩市での平成24年度市職員提案制度改善提案による「真珠のまち志摩市のPRのための真珠製品等の着用」事業において、女子部の手作り真珠製品が採用された。



写真8 JICA外国人研修生の手作り体験

一方、地元の立神小学校では、毎年、真珠養殖の体験学習を行っており、保護者である女子部員の作業場でも行われている(写真9)。小学5年生が1年後の卒業式に向け、真珠の核入れ作業や貝掃除作業に悪戦苦闘しながらアコヤ貝を育てている。自分たちで育てた真珠でブローチを作って、卒業式で胸に着ける経験は、地元ならではの、とても感動的である。



写真9 立神小学校5年生の真珠養殖体験学習

② 県外での活動

平成 25 年から国主催の「子ども霞が関見学デー」に 5 年連続参加している。会場は親子で溢れ、農林水産省内で人気プログラムとなっている(写真 10)。

参加者から「本物の真珠で手作りした作品は子どもの宝ものになった」「真珠いかだの浮かぶ英虞湾に家族で訪れたくなった」等、真珠ファンが増えたことを実感した。

養殖の紹介では、「手塩にかけ育てている苦勞を知って応援したくなった」「良質の珠が約 30%しかできない養殖の厳しさに驚いた」等、養殖業への理解が深まったように思う。

私たち生産者でしか語れない真珠養殖業を伝えることで、丹念な手仕事によって生まれる真珠の魅力を PR することができた。

一方、平成 24 年から千葉県「きさらづ福祉まつり」に 3 年間、出展した(写真 11)。

障害のある人たちが、真珠アクセサリーを一生懸命に作って喜ぶ笑顔が印象的だった。真珠は人を笑顔にするパワーを持っている、と実感した。

家族の理解を得て、県外での活動は、平成 24 年度からの 6 年間で延べ 23 回出展することができた(図 5)。



写真10 子ども霞が関見学デー



写真11 きさらづ福祉まつり

(活動2) “カワイイ” 真珠アクセサリー製作・販売によって真珠を普及する取組

冠婚葬祭用のネックレスだけではなく、普段でも気軽に着けられる真珠アクセサリーが普及すれば、真珠をより身近に感じてもらえると考え、女子部で真珠アクセサリーを製作することにした(写真 12)。



女性目線で、私たち自身が着けたいと思うデザインを考え、“カワイイ”製品を作り、販売している。真珠は少々の傷や変形で価格が下がるため、それを有効活用することで、リーズナブルな価格が実現できている。

購入者は「かわいくて、毎日着きたい」「友だちにもあげたくなった」等、口コミでの反響が大きく、女子部製品ファンになったリピーターも多い。

“カワイイ”真珠製品は、イベントでの直販に加え、平成25年からはオンラインでも販売している。売上げは、サミット効果もあって、過去の2倍となる約1,600万円となった(図6)。結果として、自然な流れで真珠の6次産業化につながり、真珠PR活動が新しい広がりをもたらした。



写真12 “カワイイ”真珠アクセサリー製品

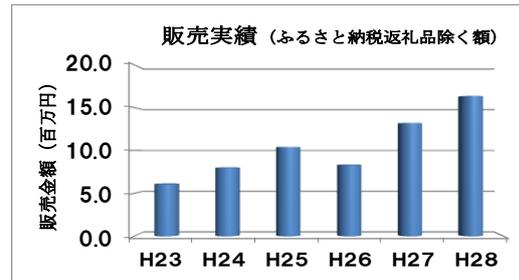


図6 女子部真珠アクセサリー販売実績

(活動3) 女性の養殖業者が暮らしやすく、活躍できる環境づくりをめざす取組

家族経営の真珠養殖業の技術は門外不出で(写真13)、その暮らしにも封建的な風潮があり、同業者の女性同士でもあまり交流がなかった。



写真13 女性真珠養殖業者の作業風景 及び 真珠の核入れ技術

しかし、女子部の結成を機に、作業をしながらのワイワイガヤガヤ会議が活発になり(写真14)、お互いの養殖での苦労話や生活情報が共有できるようになった。

また、県内・外でのイベント活動を多く経験したことによってそれぞれに自信も生まれ、持ち前の明るさの上に、何事にも団結し、行動ができるようになってきた。



写真14 作業をしながらワイワイガヤガヤ会議

さらに、“カワイイ”真珠アクセサリー製作の活動では、皆でアイデアを出し合い、デザインし、創作することに、やりがいを持つことができた（写真15）。

お互い楽しみながらも刺激し合って、女子部のチーム力で仕事を達成していく喜びは、ひとしおである。

また、イベントで消費者の声を直接聞けることで、養殖に目的意識を持つようになり、最近では、養殖作業にも提案ができるようになった。

一方、『潮の香りを届ける』がコンセプトのブログでは、各自が浜の四季や養殖の出来事を綴り、イベントの報告もしている。イベント先では「ブログを楽しみに見ている」と声をかけられ、すごく励みになっている。

最近では、地域の社会活動にも参加するなど、いろいろなことに元気で明るくポジティブにチャレンジできるようになってきた（写真16）。



写真15 真珠アクセサリーの製作工房



写真16 元気で明るく、ポジティブな女子部(真珠色の合羽と法被)

6. 波及効果

これまでの6年間、地道な活動を続けてきたことと、サミットの効果により、マスコミ等で取材され（写真17）、女子部の活動が知られるようになった。

最近では、真珠業界に海外からの視察もあり、女子部活動が、現場での真珠養殖体験の受け皿となっている。

さらに、イベントを通じて木更津漁業協同組合との親交が深まり、女子部製品の販売に協力してくれる等、関東圏での立神真珠PR拠点となってきている。



写真17 マスコミ等の取材

一方、県内の6つの真珠養殖漁業協同組合で構成する「みえの真珠養殖再生支援協議会」の若手グループが(写真18)、平成26年から4年連続して東京等で真珠PR体験ブースを出展する等、PR活動が真珠養殖業界全体へ波及している。



写真18 みえの真珠養殖再生支援協議会

7. 今後の課題や計画と問題点

志摩の地域を支える産業として、真珠養殖業が安定して持続的に繁栄していくことが最も重要である。

女子部の真珠PR活動がその一助を担い、真珠産業活性化につながっていくために、今後、以下の4つの課題に取り組んでいきたい。

- ① 真珠の魅力PR発信で志摩市の観光人口を増やし、志摩地域を活性化していきたい。このため、観光産業と連携した活動を展開していく。
- ② アコヤ真珠の魅力を世界にPR発信していきたい。このため、インバウンド(海外から来た観光客)向けのサービス提供に取り組んでいく。
- ③ 将来、真珠産業に携わる人材を増やしていくため、子ども時代から真珠に触れる機会を多く作っていきたい。このため、子ども向けの体験活動をより充実したものへ展開していく。
- ④ 美しく輝く真珠は、豊かな海があつてこそ継続的に生産される。このため、志摩の里海を守り続けることが私たちの使命と考え、英虞湾の環境保全に取り組んでいく。

(写真19)

女子部はこれからも真珠の魅力を多くの人に伝えていくためにチャレンジを続けていきたい。



写真19 未来につなぐ志摩の里海